

PHILOSOPHY

理念

しあわせ（福祉）の実現のために、 誰もが可能性を追求してやまない 柔らかな心と勇気に溢れる社会

コロナ禍、閉塞感や不安感を持つことが多い、私たちの暮らし。普段、改めて考えることがなかった、社会のこと、人生のこと、そして、「幸せ（Happiness）」ってなんだろう？「幸せに生きる」ってどうしたらいいの？など、想いを馳せることはありませんでしたか？

「幸せ（Happiness）」とは、安寧、安心感、充足感、充実、生きがい、尊厳、意欲などが良好な状態。これらすべてが良好な状態であるのも容易ではなさそうに思います。皆さんはどうでしょう？

幸福学という学問があり、しあわせ感＝遺伝子＋状況＋習慣によって度合いが左右すると解説されています。3つの要素の中でも「遺伝子」が50%を占めるとされており、自分の「遺伝子」が幸福度を低くしてしまうものだったらと思うと心配になります。

また、「状況」は、社会背景などですが、これらに、人は慣れていき、状況による幸せ感への影響は長く続かないとも説明されているので、残る、「習慣」が、幸せ感を持つ重要な要素のようです。

「習慣」は、4つの要素があり、習慣＝信仰＋家族＋友人＋仕事と説明されています。こうしてみると、「習慣」とは、日常生活を構成するものですね。

信仰は、特定の宗教に限らず生き方の指針になるもの。人生哲学なども含まれます。家族や友人との信頼と愛情のある人間関係。仕事については、種類ではなく、それが本人にとって意義があるかどうかのポイントです。収入のための仕事のみではなく、社会的活動や趣味、学業なども当てはまるでしょう。

また、幸福感を持つために、「習慣」の4要素はあると思えるけれど、必ずしも、4つのバランスが、常に整っていることを目指すのも違う気がしませんか？人生の旅の中で、いろいろなバランスの習慣を経験して、その時々、「幸せ（Happiness）」が実感できたらと思います。

With コロナ…。私たちの暮らしが大きな波に襲われる中、自らの生活の棚卸をし、自分はどんな暮らしがしたいのか？それは、本当に自分に必要なことなのか？を見極めていくことで、一人ひとり異なる「幸せ（Happiness）」が、コロナ禍の今でも満足感を持ち、得られるのではと思います。



CONTENTS

- 2 **Philosophy 理念**
- 3 **主な1年間の動き 2019.4-2020.8**
- 4 **特集「with コロナ わたしのしあわせ」**
- 8 **4つの行動姿勢と4つのプロジェクト**
- 10 **今思うこと 理事長・副理事長より**
- 12 **子どもの地域生活支援プロジェクト**
- 16 **障害者と家族の地域生活支援プロジェクト**
- 20 **社会教育・福祉啓発プロジェクト**
- 23 **広報・制作（デザイン）プロジェクト**
- 24 **第三者評価 福祉サービス／指定管理**
- 26 **横浜市地域包括支援センター職員研修（委託事業）**
- 27 **横浜市里親研修の実施にかかる事業（委託事業）**
- 28 **会計報告・活動計算書**
- 30 **組織運営**
- 31 **団体概要／会員募集**

主な1年間の動き

P12

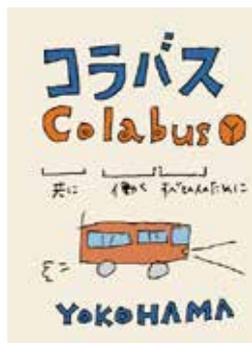
子ども・若者の育ちと自立を支える活動についての調査



子どもの育ちと自立への支援のあり方、また、子育て家庭への支援のあり方は、当センター設立以来の研究テーマです。本調査は、それを探求するため、神奈川共同募金会の助成を得て、子ども・若者の育ちと自立を支える活動団体を調査し、報告書を作成しました。次世代を担う子ども・若者に、何が起っていて、何をすべきか、地域福祉の役割がより明確になりました。

P16

コラバス <https://colabus-yokohama.jp/>



横浜市健康福祉局との協働事業をもとに、障害者とのコラボレーションを促進するプラットフォームを作りました。ホームページでは「障害」をテーマとしたブログを更新することで情報発信を図るとともに、4つのラボでの活動を報告していきます。障害のある・なしを問わず共に探究する仲間を募り、活動の幅を広げています。

P22

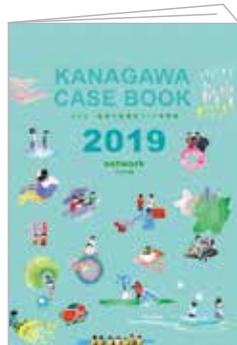
第4期中区地域福祉保健計画 骨子作成



地域福祉計画は、高齢者、障害者、児童、その他福祉の分野の各種計画の中で上位計画とされています。骨子作成にあたっては、区や区社協の方々と共に、これまでの計画の検証や様々な区民の声を聞き、区民の計画として、区民皆で策定し、行動する計画にすることが4期計画にあたっては必須と考え「もっとみんなで、もっとみんなの中なかいいネ!」をスローガンに骨子を作成。次年度も引き続き素案作りに関わることとなりました。

P14

子ども・若者の居場所づくり事例集



神奈川県社会福祉協議会と共に取り組んできた「子ども・若者の居場所づくり事例集」も最終号VOL3となりました。3年間県域の様々な支援団体の活動についてヒアリングさせて頂き、事例として記事を制作したことで、センターとして多くの学びを得ることができました。是非、多くの方に手に取ってご覧になって頂きたいです。

P24

福祉サービス第三者評価事業



新型コロナウイルス禍にある中、平成31年度から始まった神奈川県下統一の評価項目の本格導入の年となりました。評価調査者の皆さんとともに新しい評価項目での評価の取り組み方を検討し、研修を実施、さらにリモートでも受講できるよう工夫して、新しい生活様式に対応できる評価の在り方に取り組もうとしています。

P19

オンラインを活用した勉強会



主催プログラムとして初のオンライン勉強会を開催しました。重い障害のある子どもの保護者の皆さんと担当スタッフが協力して、様々な制約を乗り越え、距離を超えてつながり学ぶ機会を自分たちの力で作りました!また、「卒業後の居場所」についてこれから一緒に考え、行動していく仲間が多分野に広がりました。



With コロナ わたしのしあわせ HAPPY

西澤
力



BALANCE FLOWER SHOP

突如得体の知れないウイルスが世界中に蔓延し、私たちの生活様式は自らの意思とは別に変化を求められた。会社や学校が休業、自宅で自粛して、休日も外出禁止。薬局の前の行列や、人気のない通勤電車、静まり返った街を見ていると毎日先行き分からぬ不安感に襲われた。

私の経営する花店では、例年ならば繁忙期であるこの時期に、キャンセルの電話が相次ぎ、生きた植物を扱う商売をするものとしては壊滅的なダメージを受けた。仕事が減り、家にいる時間が増えることで、家族に対する意識は変わり始めた。

とりわけ家族の会話の話題になるのが、去年の暮れに家族に加わった愛犬「テテ」の存在である。否応無しに不安な日々を送らざるを得ない日々にウイルスのことなど知る由もない「テテ」は、私たちに笑顔と家族の会話の時間を増やしてくれることとなった。三密を避けて普段は歩かない路地裏などを歩いては季節に咲く花を発見して楽しんだ。

そして春には今年も、桜は満開に咲き誇った。例年花店の仕事で忙しく飛び回っているこの時期に、皮肉にもこんなにゆっくりと桜を見上げたのは何十年ぶりだろうか…。

「桜、きれいだなあ」新たな生活様式を受け入れながら来年は晴々とした気持ちで桜を見上げることができる世の中であることを切に願いたい。

中村
恒子



第三者評価 調査員

コロナの巣ごもり生活で、目的なく街をうろついたり、友人達ととりとめもなく雑談したりする日常が不要不急という言葉で切り捨てられてしまいました。人との目的なき触れ合いは、垣根越しの隣人との挨拶やネットを通じての会話のみとなりました。

昔からの語学の仲間から誘われ、ネットでの読書会をやってみましたが、無駄のない言葉の強さに驚きました。場を共有し、微妙な表情や声、雑談や冗談など本題と関係ないことが、いかに大切だったかと実感しました。

仕事にしている福祉の第三者評価でも、書類や面談だけで項目を評価するとその事業所の特徴は出てきません。事業所の空気感、職員と利用者との日常会話や表情、管理者と交わす雑談などからその事業所の思いや良さが見えてくると感じています。

また、趣味の旅行でも、私は名所見学より街の空気感を味わい土地の人と触れ合うことに魅力を感じています。電車や飛行機、駅で土地の人と交わした何気ない会話は楽しい思い出になっています。

ウィズコロナの今、新しい生活様式という謳い文句で人との距離が広がり、目的のない触れ合いが無駄なものとして敬遠されています。コロナ後の世界を文化的で豊かなものにするためにも、今こそ私は人、心、言葉のつながりを大切にしていきたいと思っています。

戸村
めぐみ



主婦 栄区在住

我が家は、0歳から8歳の4人の子どもと夫婦の6人家族。夫はハードワークで帰宅は連日深夜。私は、育児・家事と格闘し、家族がそろそろ休日を楽しみに暮らしています。

そんな生活が、緊急事態宣言によって、夫の在宅ワーク、小学校の休校、幼稚園の休園によって「毎日、一緒の生活」に一変しました。夫は「テレビかぎちゅうはいっちゃんだめ」の手作りのプレートを嬉しそうに扉にかけ『いってきます!』と、リビングから出勤。私たちは、扉に耳をつけて、仕事ぶりを拝聴。聞いたことのない、難しい話をしているお父さん。子どもたちは、「すごい!がんばってる!」と感じたに違いありません。

自粛期間中の新開発の遊びは、「テント基地」。ベランダに小さなテントをひろげ、「ひなたぼっこ」の看板を貼って、本、おもちゃ、お菓子を持ち込んで遊びます。ご褒美つきお手伝いポイント制度「頑張れ!お手伝い表」も作りました。子どもたちがができるお手伝いが増え、賞品贈呈式は盛り上がりました。

一方で家事量も増え、疲れや落ち込む日もありました。そんな時、夫が「わんこそばイベント」を企画。頭にねじりハチマキを巻いて、張り切る姿が、可笑しくて、ありがたくて、元気が復活しました。

コロナ禍の私のしあわせは、「子どもや夫に支えられている、支えあっていることの再発見」だと思います。家族の一人ひとりが成長する毎日をこれからも大切にしていきたいです。

「With コロナ 私のしあわせ」というテーマで、よこはま地域福祉研究センターの身近な方々に原稿をお願いしました。

西澤さんは、私たちの事務所の1階で素敵なお花屋さんを営む店主さん。中村さんは、第三者評価事業で大活躍されているベテラン調査員さん。戸村さんは、佐塚センター長の娘さんで幼稚園教員、4人のお子さんを育てるママです。石上さんは、当センターの事業を元気よく下支えする事務職員。吉田さんは、障害者施設にお勤めしながら、音楽を愛する素敵女子。長岡さんは、障害者の働くを実現するためのHPを作成するなどに協力頂いている建築家。

With コロナ、皆さん、それぞれの「しあわせ」を語ってくださいました。

石上美和



よこはま地域福祉研究センター スタッフ

私は、人は幸せになるために生まれてくるのだと思っています。幸せになるために、いろいろな人と出会い、いろいろな経験をする。そして今はコロナ禍を経験中。

グループホームで暮らすダウン症の娘は、通所先がいつも通り開所し、ガイドヘルパーさんも送迎を続けてくれ、グループホームで通常の生活を送っています。普通の生活が送れることはなんと幸せな事なのでしょう。本当に感謝しかありません。

籍は入れたものの結婚式は延期、新婚旅行はキャンセルという形で新しい生活が始まった息子。人生のパートナーと共にどんな経験をしていくのでしょうか。幸せを祈るのみです。4月にカナダから帰国した娘は、一緒に帰国する友人がいてくれてこんなに心強かったことでしょう。帰国後も親を心配し、都内の友人宅に2週間お世話になりました。周りにいてくれる友人の方々に感謝です。夫は、有り難いことに一見変わらぬ毎日を送ることが出来ています。変わらぬ日々は幸せです。

私は大好きなゴスペルが練習中止になり、歌える事がこんなに幸せな事か実感しています。またみんなと声を合わせ一緒に歌える日が、一日も早く来ることを願うのみです。

人と共に「今」を生きる！ 幸せへの鍵です。

吉田泉



音楽ユニット 楽園company主宰

「地上より2センチくらい浮いてるよねえ」ある日友人が私の事をそう言いました。別の友人は「長期滞在って感じだよね、永住じゃなくて」私の家をそう言いました。その言葉が当たってるなあと思うのは、私はいつも旅をしている途中のような感覚で生きているからです。

私はとても幸せです。でもいつも何かを探し、何処かを目指しているのです。

新型コロナウィルスによって世界が大きく変わり、私たちは驚き、うろたえ、恐れ、悲しみました。でも私はこの状況さえも旅の途中と捉え、とことん楽しもうと思います。

良い事がありました。世界の経済が一瞬止まった時、海や川や空が綺麗になり動物達が元気になりました。

私が働く就労支援のカフェもお客様が減りましたが、その分利用者さん達とじっくり過ごす時間を持てました。

自粛で家に籠った1ヶ月の間に、私は小説を書き文学賞に応募しました。書く事によって自分の過去と向き合い、さらに未来に進もうという勇気を持ちました。

この先どんな世界がやって来るのでしょうか？想像も出来ませんが、私はやはりあらゆる状況を受け入れ、楽しもうと思っています。

心を空に飛ばし、楽園を目指し、私の旅を続けていきます。

長岡建築設計



金沢区在住

遥かに人家を見て花あればすなはち入る
貴賤と親疎とを論ぜず

中唐の詩人、白楽天が春を謳った詩である。

散歩に出で、人家に花が咲いていれば入って行きその花を愛でる。花の主人がどのような人でもかまわない。親しい人でもそうでない人でも…、というような意味だろう。

今年の春は何かと距離が大切に、花を理由に人に近づく様子もなく、いっそうこんな詩が思い出された。

役人だった白楽天は「兼済」と「独善」について常に意識していたといわれる。本来は孟子の語で、世の中全体を幸福にすることが「兼済」であり、どのような状況にあっても独り修養に励むことが「独善」の意味であった。白楽天にとって「兼済」とは公の仕事の充実であり、「独善」とは個人の愉しみや喜びのことで、今で言えばプライベートの充実なのだろう。現代の言葉の「独善」のようにネガティブなイメージがない。

さて、自分に置き換えてみると僕たちの「兼済」は建築設計やまちづくりです。山や海辺の散策、庭仕事、他処の庭先の草花を愉しむことなどが「独善」で、意識においては古の白楽天とまるで変わらない日常を過ごしています。ひとりで愉しむ先に人との交流があり、「兼済」はさらにその先にあると感じています。

いつの時代にも予測できない出来事は必ずやってきて、その度に僕たちは試されるような気持ちになります。古の人々も同じだったでしょう。それでも彼らが、現代の僕たちと同じようなことを考え暮らしていたことを思い浮かべるとき、人にとっての幸福が根源的に普遍なのではないかと思う、そんなこのごろです。



ひたすら田原、俊彦

With コロナ わたしのしあわせ

HAPPY

身近な暮らし・それぞれの思い…それでも、わたしは生きていく



- ①みんなでお話するとき、心が温かくなる
- ②孫といっぱい、いっぱい遊びました
- ③海!山!川!!そして高原!
- ④自分で作った料理をおいしいと言ってもらえた!
- ⑤健康と笑顔
- ⑥心は空を飛ぶ
- ⑦ゲームをすること
- ⑧旅に出たい!
- ⑨楽しいことみ一つけた
- ⑩新しい気づき
- ⑪Share the moment
- ⑫アイスを食べる
- ⑬起きたことを受け止めて
- ⑭自転車とコーヒー

- ⑮変わることを楽しむ
- ⑯家族一緒に困難に立ち向かえた!
- ⑰人とともに今を生きる
- ⑱友人や家族と楽しく過ごせていること
- ⑲今
- ⑳ぼくの人生10000年!の〜んびり行こう!
- ㉑月光浴
- ㉒台所 庭 ときどき友
- ㉓ともだちとあそぶのがうれしい
- ㉔家族そろってご飯を食べる時
- ㉕Two comfortable forever
- ㉖3人のおにいちゃんたちがすごくおもろくてたのしいの
- ㉗家で運動
- ㉘健康第一

- ㉙それでもつながれる
- ㉚遊びを通して子供達の成長を感じた
- ㉛子どもたちと多く触れ合えた事
- ㉜笑えること
- ㉝立派でなくていい。普通でありたい。体も心も。それがなかなかむずかしい
- ㉞下を向かずに前を向こう!!
- ㉟遠くの友だちとZOOM飲み
- ㊱家族との時間
- ㊲じぶんできめて、いきていく
- ㊳あるけますように
- ㊴Rockの世界にハマる♪
- ㊵大好きなゴミ収集車にバイバイする時
- ㊶新しいつながり方の発見!!
- ㊷ダンス・おしゃれ・工作

- ㊸ひたすら田原俊彦
- ㊹家族のために心身共に奮闘する日々 やりがいにあふれてる。燃える〜
- ㊺学校が休んで孫とゆっくり遊べた。
- ㊻菊芋の委託先のお客様とゆっくり話せた。
- ㊼ようちえんのバスにのれる。うれしい
- ㊽優しさは強さ
- ㊾つながりを大切に!
- ㊿出会い
- ㊿学校で、みんなとべんきょうできること。
- ㊿つまらないことを言って、みんなで笑いあっている時

Basic stances&Projects

1 今を知るために 調査・研究に取り組みます

地域社会は変化し続けています。少し前に社会問題となったことが、さらに様相を変えて問題となり、顕在化します。

変化のスピードと問題の多様化、複雑化に、制度も具体的対策もついていけず、様々な暮らしの課題に手を差し伸べられず、継続した課題として市民生活を脅かしています。私たちは、「何が起きているのか?」「なぜ起きているのか?」「どのようにしたら改善ができるのか?」を明らかにし、社会で共有して対策を打つことが必要と考えています。そのための第一の基本姿勢として、調査と研究への取り組みを続けています。

2 丁寧に信頼関係を築き、 質の高いネットワーキングを構築します

私たちのミッションを実現するために「つながり」は大切な財産です。

助け合い、育ちあい、高め合うネットワーキングを作るには、たがいを知り、信頼関係を築くことが必要です。簡単なことではないですが、組織の安定と継続のためには、不可欠な要素です。

3 多様な地域の特徴を知り、 客観的な分析と提案をします

中間支援として、地域社会や市民への観察力を持つことは不可欠です。変化し続ける社会に対する観察力を持ち、その中で何をすべきか、成果を設定した時間や空間をマネジメントした企画を立案し、実践につなげていきます。

4 観察力を持ち、企画・行動への プロセスを実践します

私たちの仕事は、市内から県内外に広がっています。多様な地域で、地域の特徴を知り、地域とのつながりを得ています。その積み重ねによって、地域に適した取り組みの方法を選択したり、他の地域との比較分析の上で客観的な取り組みの提案や実現につなげることができます。

子どもの地域生活支援プロジェクト

子ども・若者の居場所に関する実態を知る 学習支援についての取り組みを知る

2019年度は、今後のこどもプロジェクトでの取り組みをさらに発展させるためのベースとなる、現状調査結果の分析やその結果をまとめ広く周知するための報告書の作成などを中心に、非常にタイトなスケジュールの中で業務を遂行してきました。毎年実施している、子どもや若者の育ちや自立に関わる、支援者研修事業や事例集の制作についても、継続して取り組みました。今後はこれらの成果を基に、全ての子ども・若者の生活と成長を後押しできるよう、中間支援組織として様々な形で携わっていきたいと思います。

障害者と家族の地域生活支援プロジェクト

障がいがあってもなくても ともに働くコミュニティ創出を目指す

いつの時代も、仕事により個人が経済的な生活基盤をつくることは不可欠ですが、一方で金銭的な利益だけが目的ではないことに多くの人が気づいています。近年は従来のオフィシャルワークに限定しない多様な働き方、生き方を模索する人が増え、新型コロナウイルスの影響によりその傾向は強くなると考えられます。障害があってもなくても、「その人にとって最適な働き方」を選び力を発揮できる、そんなコミュニティを地域に創出することがプロジェクトの目的です。



社会教育・福祉啓発プロジェクト

もっと多くの人や組織と共に広げたい・バリエーション を増やしたい社会教育プログラム

もっともっと力を入れて行いたいプロジェクトです。変化の著しい社会の今を、様々な角度・視点から「知る」ことが重要です。例えば「介護」をテーマにすると、介護サービスは介護保険サービスだけではありません、民間サービスや地域の福祉活動などについても情報収集し、サービスの内容・価格など総合して自分にもっとも適したサービスが選択できる力を持つことは、高齢者のみに必要なものではありません。「介護とお金のはなし」「地域で住民がつくる介護サービス」など、これまで作ってきた社会教育・社会啓発のプログラムを、自治体・地縁団体・企業・ボランティア活動団体など様々なクライアントのオーダーに応えながら、出前型でお届けしたいと考えています。また、社会教育・啓発の分野も更に広がっていきます。

広報制作（デザイン）プロジェクト

福祉の新しい見え方・隠れていた視点を引き 出しビジュアル化する

デザインのもつチカラは、一見関連性のないような情報から、エッセンスを取り込み、交通整理した上で、見える形にすることだと思います。

抽象的だった概念やアイデア、感覚的なものの中にある「本質」を探しながら、形に落とし込んでいくプロセスには、たくさんの取捨選択があります。どんな分野においても、デザイン的な考え方は、創造的に問題を解決していく可能性を秘めています。



PROFILE

聖徳大学・聖徳大学短期大学部心理・福祉学部 社会福祉学科 教授
主な著書に「少子化と社会法の課題（共著）」法政大学出版会、「社会福祉の新潮流⑤地域福祉論（共著）」学文社／「地域福祉とソーシャルワーク実践／実践編（共編著）」樹村房／「地域包括ケアシステム構築に向けた相談支援体制のあり方に関する研究」星槎大学研究紀要第10号／「横浜市における地域福祉施策の展開過程にみるインフォーマルケア体制整備の考え方の変遷～市民参加による福祉のまちづくりに向けて～」コミュニティとソーシャルワーク 第4号などがある。

理事長 豊田 宗裕

Munehiro Toyoda

「しあわせ（福祉）の実現」をテーマに活動を開始した当センターも、設立から8年目を迎えました。ここ数年は、特に児童や子供にかかわる事業・調査を中心に、それを支える人々、組織・団体との協働事業を積極的に展開している所であり、直近にはその集大成の一つとして「子ども・若者の育ちと自立を支える活動についての調査」報告書を発刊したところがあります（2020年5月）。今回の調査事業を通じて、地域社会には同じ志や目的をもって活動している多くの団体がいることを改めて知り、そしてこうした団体の理念や活動を受け止め、つないでいくことの大切さを、さらに実感いたしました。また事業の実施に当たっては、県共同募金会をはじめ関係機関や実践団体、多くの研究者の皆さまにもご協力を頂き、私たちの事業実践に大きな力を頂けたと感謝している所でもあります。今後も、こうした様々な活動を通じて知り合った多くの方々のお力を借りながら、少しでも地域社会のために役に立てるよう努力をしまいたいと考えています。

さて2020年は、COVID-19（新型コロナウイルス）の影響で私たちがこれまで行ってきた社会・経済活動の多くが休止・停止してしまい、その対応に追われる日々で今日まで来てしまったように思います。世界的な緊急事態の中、毎日の報道を見聞していると、このまま事態が延々と続くのではないかと心配してしまい、思考がどんどんマイナスに向かっていくように感じます。本当に大変な時代を迎えていることを、改めて実感しているところです。

しかしながら一方で、こんな時にこそ私たちは前を向いて、そしてこれからのことを真剣に考えていかなければならないのではないかと考えています。「新しい生活様式の創造」が叫ばれる中、これまでと違う時代を迎えるのだからこれまでのような考え方だけにとどまるのではなく、新しい考え方・新しい視点で私たちの日々の生活を見直していくことが必ず必要でしょう。その中で、「新しいしあわせの形（HAPPINESS）」が実現されることが何よりも重要ではないでしょうか。

「新しい時代の、新しいしあわせ（HAPPINESS）の創造」を目指して、当センターは今年度の事業を実施したいと考えております。ご指導のほど、よろしくお願い致します。

慶応義塾大学卒 神奈川県立保健福祉大学 大学院修了
横浜市地域ケアプラザ職員、認定 NPO 市民セクターよこはまの勤務経験から地域福祉への関心を深める。

2012 年特定非営利活動法人よこはま地域福祉研究センターを故泉一弘氏と設立。以来センター長 副理事。神奈川県立保健福祉大学実践教育センター・相模女子大・横浜 YMCA 学院 講師 神奈川県社会福祉審議会委員 神奈川県地域福祉支援計画評価・推進等委員。



PROFILE

センター長・副理事長 佐塚 玲子

Reiko Satsuka

2020 年は、オリンピックイヤーとして、活気ある一年となるはずでしたが、新型コロナ感染症が世界中に猛威を振るい、その長期化は、経済・教育・福祉等々、様々な問題へと拡大し続けています。私たちの国は、かねてより、少子化に歯止めがきかず、生産年齢人口も減少の一途をたどる中、団塊の世代が後期高齢者となることを踏まえ、「2025 年問題」として、社会保障の再構築が懸案となっていました。

しかしながら、今、人生 100 年時代を迎え、更にコロナ感染症が拡大する中、制度政策の改革だけではなく、私たち、ひとり一人の生き方も、改めて考え直すことが、いよいよ求められる時代が到来したと感じています。

これまで、20 歳前後まで教育を受け、その後、60 歳前後まで社会で働き、その後の人生は余生という、多くの人々の中で共有されていたロールモデルが、人生 100 年時代を迎え覆われています。既に、100 年を生き抜く単一のロールモデルなど存在しません。

年齢とステージは関係がなくなり、キャリアは多様化します。そのためには、人生全体を貫く価値観を意識的に問い続けることや、長い人生を生産的に送るために経済だけではなく、人のつながりや知識・情報等、無形の資産を蓄えることが重要になります。だからこそ、これからの時代の「地域福祉」も改めて、誰のために、誰によって、何を目指して行うのかを明らかにする必要があります。

もちろん今、困りごとが生じている人を支えられる地域福祉を推進する必要も高まっていますが、困りごとが生じにくくするための人や地域への予防や社会教育も、その在り方が求められるでしょう。更に、人生 100 年を生き抜くための、情報や生き方を模索するための活動や出会いの場も、これまでの在り方に捉われない発想による開発が必要になってくると思います。

「これまでに経験したことのない…」は、近頃、災害等でもよくつかわれるワードですが、福祉社会の今も未来も、これまでに経験したことのない事態を迎えているからこそ、新たな志向や行動が必要です。未知の世界に向き合うとき、不安という壁が目前に立ちはだかります。

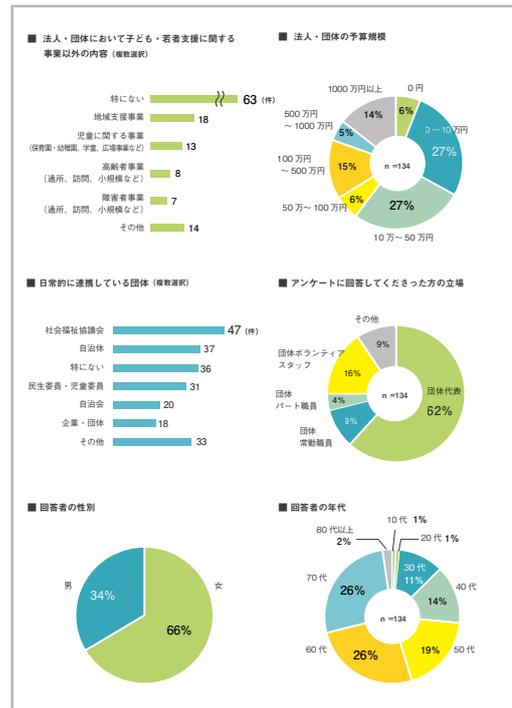
しかし、日々の暮らしの豊かさ、人生の豊かさには、様々な景色があり、私たちが懸命に求める先に拓かれることをあきらめない私たちでありたいと思います。今年度のアニュアルレポートのタイトルは、あえて「happiness」。不安な時だからこそ、しあわせを考えたいと思いました。

よこはま地域福祉研究センターも、コロナ禍、少なからず事業にも組織経営にも影響を受けていますが、理事・会員・事務局そして、取り組みを共にしてくださっている方々と手を携えて努力を重ねていきたいと思っています。変わらぬご支援・ご協力をお願いいたします。

本調査による発見

- ・子ども・若者の育ちと自立を支える活動・・・自治体や中間支援機関に把握されていない！
- ・子どもや若者に豊かな「交流」を！から始まる主体的な市民活動
- ・法人格取得していない団体が7割、予算規模、年間50万以下が60%
- ・参加費徴収している団体62% していない38% 参加費払えない子どもは、全体の22%
- ・ニーズに合わせた柔軟な活動 週1回以上が47団体 早朝実施6件 夜間実施28件
- ・活動理念は96%の団体が、個性豊かに掲げている
- ・子ども・若者の家族にも寄り添う活動団体
- ・個人（子ども・若者・その家族・担い手）の幸せと暮らしやすい地域の実現を願う
- ・場所提供・広報・助成金でつながる？自治体・社協との関係
- ・専門家と協働のソーシャルワークの実現は、団体格差あり
- ・担い手に求められるのは、専門知識が必要な時もあるが、子どもに対する姿勢とチームワークが重要
- ・優れた活動団体の子ども・若者の育ちの課題についての発見機能気になる子どもは84%
- ・子ども・若者の気になる点に対する観察力
- ・課題が発生する要因は、家庭と地域と学校とし更に具体的に捉える活動者
- ・活動による成果は、子どもの変化・団体の成長・担い手の変化
- ・活動者として課題と感じるスキルは 子どもとの関わり方、困難なケースも増えている
- ・ネットワークで期待するのは、困難なケースへの対応
- ・団体の今を自己分析しつつ、今後への願いは「活動の継続」
- ・子ども・若者の育ちや自立を支える実感！
- ・子ども・若者、そして、地域に、更に、団体の実現したいことの多様性

仕様：A4 無線綴じ 164ページ カラー刷り
 企画:取材・編集：NPO法人よこはま地域福祉研究センター
 デザイン・DTP：NPO法人よこはま地域福祉研究センター
 交付金：社会福祉法人 神奈川協働募金会
 発行日：2020.5



コアメンバー会議



神奈川新聞7月16日付(地域総合)に掲載されました。



第4回 子ども・若者の居場所づくりフォーラム & 子ども・若者の居場所づくり事例集2019

第4回 子ども・若者の居場所づくりフォーラム

第4回となった「子ども・若者の居場所づくりフォーラム」は、社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会・NPO法人よこはま地域福祉研究センター・社会福祉法人神奈川県共同募金会の協働で実施しました。全国の「子ども食堂」設置推進を牽引する湯浅誠氏に基調講演を依頼、「子ども食堂」という仕掛けを通じて構築を模索する「地域のつながり」の重要性についてのお話を伺いました。さらに、活動報告として、研究センターで作成してきた「子ども・若者の居場所づくり事例集」で取り上げた3団体をお招きし、各活動団体の活動を通じて、地域の子どもや家族の抱える課題をどのように捉え、どのように支援しているのかについて発表していただきました。



基調講演：湯浅誠さん



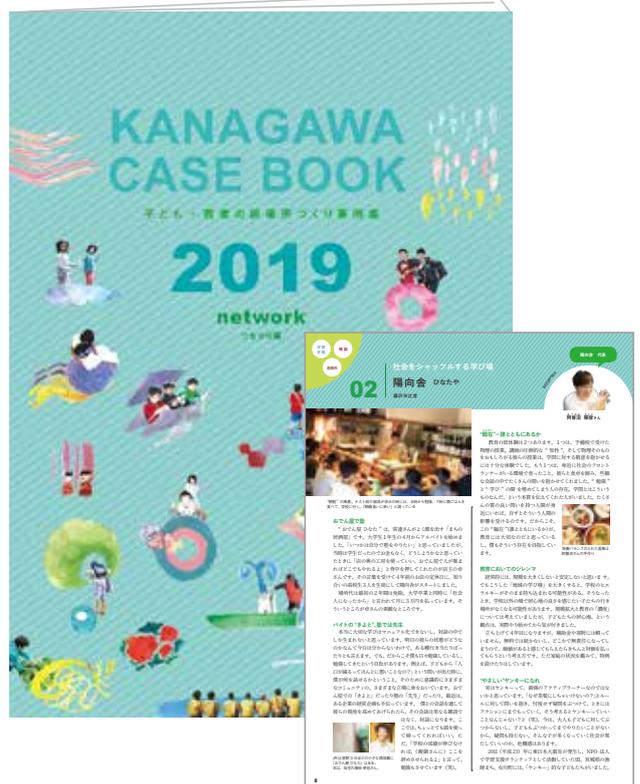
活動報告をしてくださった皆さん

開催日時：2020年1月29日
 基調講演：社会活動家 東京大学特任教授 全国子ども食堂支援センター・むすびえ理事長 湯浅 誠氏
 活動報告：①永井 圭子さん（たまめし食堂）②生出 恵子さん（おだていカフェ）③大河原 珠里さん（結まる）

子ども・若者の居場所づくり事例集第3号発行

神奈川県・神奈川県社会福祉協議会・神奈川県共同募金会と協働で、子ども・若者を育み、自立を支える取り組みとして作成している事例集。今回第3号のテーマは「ネットワーク＝つながり」編。子ども食堂、学習支援、就労支援、多世代交流など多様な分野の11団体を取り上げています。時には活動団体の力だけでは解決できない困難な問題を発見することもあります。あるいは、活動団体自身が、活動を継続する中で様々な問題に直面します。これらを、地域にある様々な繋がりから、時には支え時には支えられ、少しずつ前進している姿を見ることができました。

仕様：A4 中綴じ 40ページ カラー刷り
 企画取材・編集：NPO法人よこはま地域福祉研究センター
 社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会
 デザイン・DTP：NPO法人よこはま地域福祉研究センター
 協力：社会福祉法人 神奈川協働募金会
 発行日：2019.12.24





横浜市こども青少年局の委託を受け、「横浜市子どもの居場所づくり課題解決ケースブック」を作成しました。

横浜市内では市民の手で様々なかたちの「子どもの居場所」が運営されています。それぞれの団体が、どのような目的をもって運営し、活動していく上でどのような課題があるのかを探るため、令和元年10月～12月にかけて、居場所を運営している約50団体にアンケート調査を行いました。

その回答結果から、地域の中の多様な子どもの居場所が、子どもや若者の成長に寄り添いながら、子どもたちに家庭や学校だけでは得られない、人や地域との関係性を育てていることがわかりました。しかしながら、活動上の課題も抱えています。それをどのように解決しているのかを探るため、「子ども食堂」「学習支援」「プレイパーク」「地域の居場所」など活動の異なる7団体にヒアリング調査を行い、事例集を作成しました。

それぞれの団体ごとに、課題整理マトリックスを用いて課題を整理し、その解決のプロセスや、アプローチ、具体策をまとめています。どの居場所も様々な課題を抱え、それを乗り越えようとしている課題、乗り越えることができた課題もありましたが、どうしても自分たちのチカラでは解決できない課題もあり

ります。このケースブックが他の居場所を運営している団体や、これから居場所づくりを始めようとしている方の参考になると共に、居場所同士や関係機関、また、それを支援する専門機関とのつながりが生まれるヒントになればと思います。



こちらのURLより閲覧いただけます

仕様：50ページ PDF版
企画取材・編集：NPO法人よこはま地域福祉研究センター

学習支援の担い手向け研修の実施



津富 宏さん



荒井 佑介さん

神奈川県共同募金会の交付金を活用し、2018年度より開始した本研修は、2019年度も3回シリーズで開催しました。テーマを「学習支援の意義と限界を考える」とし、子どもたちの学習支援の活動が広がった今だからこそ、改めて「意義」や「限界」について考える内容としました。学習支援に携わる団体は多く、また、団体の抱える課題も多岐にわたっていることも分かってきましたので、今後ともこの研修が継続できるよう考えていきたいと思います。

- 第1回 2019年11月24日 「生き抜くための学習支援」
講師：静岡県立大学 教授 津富 宏氏
- 第2回 2019年12月21日 「居場所支援のいま」
～子ども・若者の育ちや自立を支える活動調査から見てきたこと～
講師：NPO法人よこはま地域福祉研究センターセンター長 佐塚 玲子
- 第3回 2020年1月25日 「学習支援のその後」～進路就職への寄り添い～
講師：NPO法人 サンカクシャ 代表理事 荒井 佑介氏

「共生」のリアルに向き合い、ともに探究し実践する

障害プロジェクトでは障害者とともに働くこと、障害者を含む誰もがよりよい働き方の創造を目指すことをテーマとした事業が中心となっています。社会的な背景からも、多様な働き方、生き方を探究する動きがあり、その実現に向けては異分野・異業種の協働・協業が欠かせない状況となっています。

2019年度も多数の事業を実施しました。それぞれの事業目的を果たすとともに、プロジェクトとしても様々なジャンルの専門家・実践者の方々とチームを組み、ともに探究を続けています。

障害者との協働を支援するプラットフォーム構築

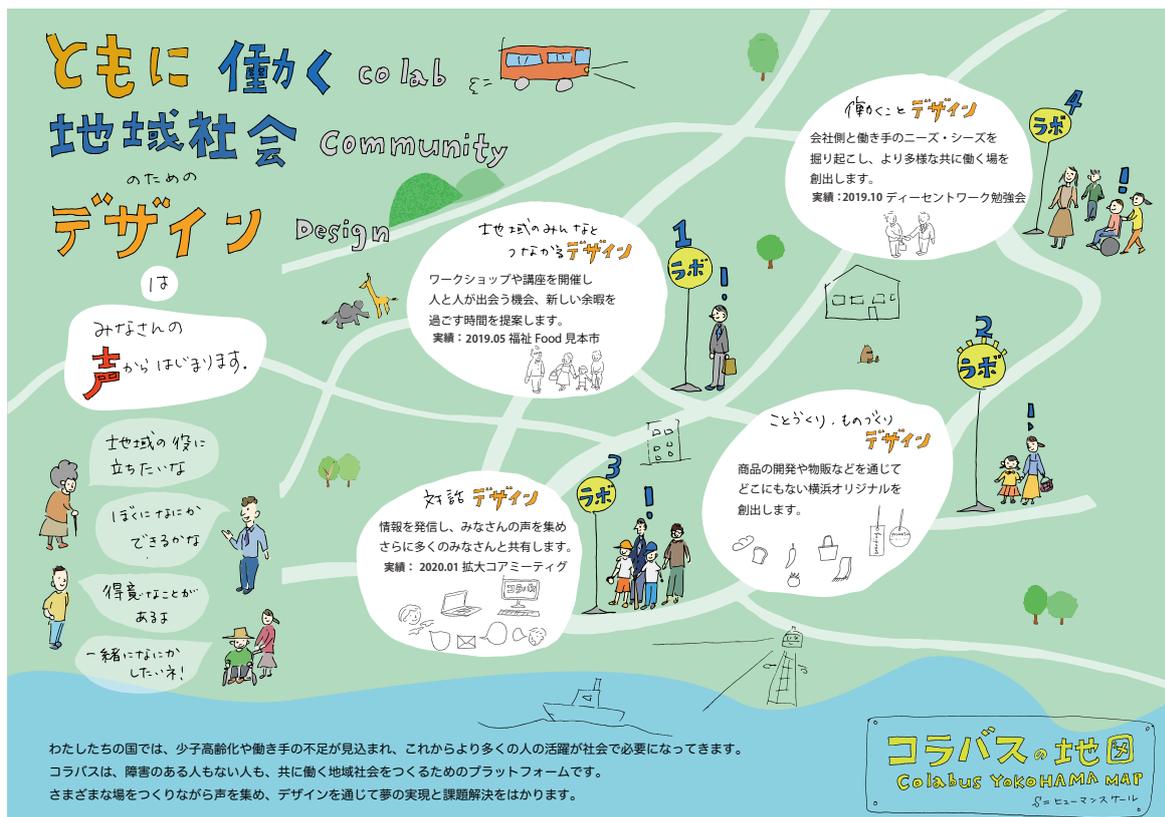
横浜市障害者雇用創出・就労啓発事業での地域ネットワーク形成事業

横浜市健康福祉局障害自立支援課（旧障害企画課）との協働事業では、2018年度に続いて障害者雇用・就労啓発を目的とするカフェ開設のための支援と協働の仕組み（プラットフォーム）づくりをおこないました。

2019年度は各事業所、関係機関、地域団体、各分野の専門家の皆さんにご意見をうかがったうえで、横浜市と当センタープロジェクトメンバーで検討を重ねました。2020年7月、プラットフォーム「コラバス（Colabus）」が本格始動し、ホームページ上でのコミュニティづくりと実働を併せた活動を推進しています。

「福祉×○○」「障害×○○」の協働をサポートする

障害のある人とそうでない人が、地域の中でともに働く場や機会がもっと様々あるとよい。そんな状況に近づくため、4つのテーマを核に関心のある人が誰でも参加できる仕組みを作っています。4つのラボは独立しつつ、重なり連結する部分も持ち、オープンでフラットな関係性を目指します。



「つながる」デザイン



当センターでは、福祉的就労の場である就労支援事業所等と地域の人々が出会う機会を作る活動として、「Food Presentation ※」を企画運営してきました。協働以前にまずお互いが知り合う、わかりあうことを基本とし、福祉現場と地域が継続的につながる仕組みを創造していきます。また、障害者を雇用する企業ともつながり、社員の方々の疑問や悩みに応える中で、協働の方法を検討する試みも始めています。

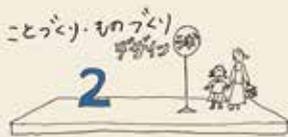
※障害者施設等の手作りをお客様目線でシビアに評価する、商品品評会

公開イベント「YOKOHAMA福祉Food見本市」

横浜市役所新庁舎内にオープンした「ふれあいショップ」運営者公募のPR等を目的とした公開イベント「YOKOHAMA福祉Food見本市」は、100名を超える来場者で大盛況となり、様々な立場・ジャンルの人や組織の出会いの場ともなりました。



「ことづくり・ものづくり」デザイン



障害のある人が力を発揮できる仕事は様々広がってきましたが、福祉現場における商品開発については、実施内容の検証が十分ではないと思われます。実際に、福祉支援と経営のバランスに悩みながら、手探りで商品づくりを続けているという現場も多くあります。コラバスではこのテーマについて前例のない調査研究に挑戦しています。この分野ならではの「よいもの・ことづくり」のビジネスモデルを検討し、実践につなげていきます。

商品づくりを続けているという現場も多くあります。コラバスではこのテーマについて前例のない調査研究に挑戦しています。この分野ならではの「よいもの・ことづくり」のビジネスモデルを検討し、実践につなげていきます。

障害者施設における商品開発力向上に関する検討モデル実施業務（横浜市委託）

利用者の工賃向上等、就労支援事業の目的達成を念頭に、魅力ある商品を開発し成果を上げるためのプロセス等を分析しています。企業等施設外との連携による成功例のヒアリングをおこない、現実的なビジネスモデルを検討していきます。

「対話」デザイン



人間は本来一人一人ばらばらの個性、特性を持っていて、お互いを理解し合い、違いを認め合い共生するためには、必ず痛みや困難を伴います。「障害」とは？「働く」とは？…個人の価値観が特に問われるこのテーマで、わからないから知りたい、わかりあいたい、という気持ちに正直に、諦めずに向き合い、その先にある新しい景色と一緒に見る人を増やしたい。そんな対話のあり方を模索する実践をおこなっています。

人間は本来一人一人ばらばらの個性、特性を持っていて、お互いを理解し合い、違いを認め合い共生するためには、必ず痛みや困難を伴います。「障害」とは？「働く」とは？…個人の価値観が特に問われるこのテーマで、わからないから知りたい、わかりあいたい、という気持ちに正直に、諦めずに向き合い、その先にある新しい景色と一緒に見る人を増やしたい。そんな対話のあり方を模索する実践をおこなっています。

映画を題材にした意見交換会（拡大コアミーティング）



発達障害の親族の生活を記録したドキュメンタリー作品「だってしょうがないじゃない」の映画監督であり、自身も発達障害の診断を受けている坪田義史さんをお招きし、鑑賞後の感想や思いを語り合い、これからのビジョンを共有しました。

鑑賞後の感想や思いを語り合い、これからのビジョンを共有しました。

「働くこと」デザイン



正確な未来予測が困難な社会情勢の中、働くことの意味を問い直し、自身にとっての「最適な働き方（ディーセント・ワーク）」を求める人が増えています。人生100

年時代の中で、どんな人も障害者となる可能性は高く、障害があってもなくても自立し、やりがいや誇りを持って生きるために…これからの仕事のカタチを探究します。

ディーセント・ワークについて知ろう（勉強会）



施設のサービス種別、雇用形態、障害種別などを超えて「働く」ことの意味や目的、実践方法を問い直す勉強会をおこないました。

すべてのデザインの基盤として

ホームページ「コラバス」を開設しました。ホームページは情報発信の場というだけでなく、イラスト、写真、文書を駆使してビジョンの共有を図り、ステークホルダーの創出と具体的なアクションを生み出すためのフィールドとして運営していきます。

「コラバス」 <https://colabus-yokohama.jp/>



青葉区自主製品販売促進事業

横浜市青葉区高齢障害支援課・青葉区地域自立支援協議会からオファーを受け、新規事業の企画運営に協力しました。自主製品のレベルアップを目指す区内3事業所に対して課題に沿った活動目標を設定し、施設外のサポーターによる伴走チームが約半年間支援するというものです。さらに活動の成果を報告する公開イベント「ファンミーティング」を開催、80名以上の方が来場し、応援コミュニティ「AOBALution2020」を結成しました。

「AOBALution2020」（通称アオバリ）は、当センターの自主事業「Food Presentation」の発展形として、イベント実施をきっかけに出会った人々が区レベルで協働コミュニティを形成する、持続型モデルの一つとなりました。今後も自立支援協議会の自律的な活動を支援しながら、アオバリを支える仕組み（プラットフォーム）の機能強化を図っていきます。

青葉区で、インクルーシブなまちづくりに参加しよう!

AOBALution 2020

第1回ファンミーティング

11月18日 SAT

障害のある人もない人も、誰もが住みやすくワクワクするまちづくりを目指して。
青葉区では、障害のある人が区内でいきいきと暮らすことを応援するチームを結成しました!
その名も、AOBALution2020(通称アオバリ)。
たくさんの住民の皆さまの応援により進行中のアオバリの活動を紹介し、仲間を募めるファンミーティングを開催します!

商品販売会 & ワークショップ
13時～17時

ファンミーティング
【事前申込み制(要申込料)】
18時～20時
参加費 1,000円/人
(ドリンク500円/障害者費500円)
定員 100名(先着順)
- 質疑応答
- 伴走チーム活動報告
- ファンクラブ設立報告
- 協力者による活躍コメント
- Q&Aセッション
※20名以上参加費を払い込まない様子は3500円(飲み放題付)/人、
ごちもぜひご参加ください。

会場 PEOPLEWISE CAFE 神奈川県横浜市青葉区美しが丘2-23-1 WISE Living Lab ひがしBASE
東田園駅前南側ビル3階3号より徒歩2分

主催 青葉区地域自立支援協議会/中活動部会・青葉区
企画協力 NPO法人よこはま地域福祉研究センター 後援 青葉区社会福祉協議会 企画協力 PEOPLEWISE CAFE



社会福祉法人の人材養成支援

社会福祉法人研修事業

研修・コンサルティング事業として、障害者の就労・生活支援施設を運営する2つの社会福祉法人の職員研修プログラムを企画運営しました。社会福祉法人に様々な変革が求められる現状の中、法人の皆様とともに考え、職員が自主的に学び合う機会をデザインすること、さらに法人外とのイノベーションにより組織のバックアップを図ることなどを旨として支援しました。



社会福祉法人A様>

2017年から継続し、全職員の育成を目的とした連続プログラムの企画運営を担当させていただいています。2019年は実践の根拠となる利用者支援とチームアプローチ等の理解に加え、職員間コミュニケーション、動画によるモニタリングと報告など、職員の皆様の関心とニーズに合わせた発展的な内容となりました。

社会福祉法人B様>

2019年から基幹研修の企画運営とともに、職員人材育成のビジョンと方法等について、法人との意見交換や職員アンケート調査結果などをもとにしてレビューし、アドバイスをさせていただいています。

障害児・者の保護者の自律的活動支援

障害児・者の保護者のための相談・交流の場Candy lei

Candy lei ではサロン活動の定期開催とともに拡大プログラム（勉強会）を企画しました。6年目となる活動にはサポートメンバーが複数加わり、保護者の方々の自主的な運営に向けてさらに前進した年となりました。年度末からは新型コロナウイルスの影響により、集合型のサロン活動が難しくなりましたが、状況を前向きにとらえオンライン上での情報交換や交流を深めています。

重い障害のある子どもがいる保護者の方々が社会とつながるための楽しい活動だけでなく、知識や情報を得るための学びの場づくり、必要な社会資源を創出するための活動など、活動レパートリーが広がってきました。2019年度は複数の助成金を活用し、事業推進と維持継続を図りました。

- ・みずほ福祉助成財団
- ・なかふれあい助成金
- ・パルシステム神奈川ゆめコープ活動応援プログラム



「Candy Lei（キャンディレイ）」はいろんなフレーバー（経験を持つ）のキャンディ（お母さん）の輪をイメージしたネーミング。気になることを一緒に考え、ひとりひとりに合った生きるヒントを一緒に探す場があったら…という想いから生まれました。

- ・ 7/19（金） Caféアニミで新聞バッグ作り
- ・ 10/28（月） “かご作り体験”@地域活動センターフレンズ南
- ・ 11/13（水） 秋からのスキンケアとメイクレッスン
- ・ 12/16（月） 100ネエサンワークショップ ガッツビーと西 地域交流室
- ・ 3/27（金）～4/6（月） 年間作品ギャラリー展示 ガッツビーと西



Candy Lei

センター主催勉強会vol.12

毎年2回、関心のあるテーマに沿って、職員、会員を含め、一般に広く公開した勉強会を実施しています。

「医療・教育・福祉の縦割りを乗り越えた暮らしをデザインする」

テーマ：障害児の卒業後の居場所

特別支援学校に通う子どもたちの卒業後の居場所をインクルーシブな発想で作りたい！という夢を実現した保護者の方々による団体「びゅあ」との出会いから、横浜でもこのテーマでの対話を深めようと企画したCandy leiとのタイアップ企画。新型コロナウイルス感染拡大の影響により、2月に予定した集合型での開催を断念し、当センター主催では初のオンライン実施に再構成して開催しました。環境整備やスタッフのオペレーション訓練、複数回のリハーサルを経て、オンラインならではの様々なメリットを全国各地からご参加者いただいた皆さんとともに実感することができました。内容に対しても大変高い評価をいただき、今後異分野多職種が自分事としてこのテーマを考えていくスタートラインをつくることができました。



プログラム> 2/29→延期 8/29オンライン開催

- ①実践報告：「生活介護施設「びーす」をつくるまで」 NPO法人びゅあ（静岡市）
- ②講演：「重症心身障害児者を取り巻く制度の変遷について」
愛知東邦大学教授 西尾 敦史先生
- ③パネルディスカッション：登壇者と横浜市の当事者家族・進路担当の先生

海老名市社会福祉協議会協働事業

海老名いきいきカレッジ

地域のために、自らのために 高齢者の社会参加を促進する



平成 30 年から、海老名市社会福祉協議会と共に、「海老名いきいきカレッジ」の企画を行っています。本事業は、一般介護予防事業として、海老名市より、社会福祉協議会が委託を受け実施しているもので、対象は、65 歳以上の高齢者です。

介護予防のありかたは、ここ 10 年の間に大きく様変わりしており、転倒骨折予防や脳の活性化といったことのみではなく、高齢者の社会参加を促進し、人生 100 年時代、いつまでも社会性を失わず、生活者としての知識・情報をキャッチし、暮らしに活かすチカラのある高齢者、また、地域のために、自らのために福祉推進など、主体的な活動者としての側面を持つ高齢者であるための取り組みが重要視されています。



年度最後の作文「これが私の生きる道」
様々な皆さんの想いに触れます。作文を皆さんの前で披露して頂きました。





令和元年も、65歳から92歳まで、豊かな高齢期ライフを目指す方々が集まりました。個性豊かな皆さんが、1年を通じて、互いを知り、交友を深めていきます。

お互いを知る中で、自らの考えを研修中に他者に伝えあい、様々な刺激を受け、生き方を模索します。私たちも、そうしたカレッジライフを共にして、講師として伝えるだけでなく、多くを学ばせて頂いています。次年度も、引き続き、担当することになり、今から、新たな出会いを楽しみにしています。



毎年、受講者の方からお手紙などを頂きます。とても嬉しいことです。令和元年度は新型コロナウイルス感染症拡大で、卒業式もできませんでした。「また、会いましょう」とお返事をいたしました。

広報・制作（デザイン）プロジェクト

Public Relations & Design PROJECT

海老名いきいきカレッジ パンフレットの企画・デザイン

「海老名を愛する大人のための学校」

超高齢社会を迎え、もっと積極的に高齢期を生きることを考えたい。実現する豊かな高齢者の暮らしを仲間とともに描き、行動する。そんな想いを後押しするカレッジです。

昨年度は、第3期となる2020年度の募集用パンフレットをデザインしました。

コンセプトは「大人の学校」です。全体の年間カリキュラムを時系列で掲載し、オリジナルイラストを使うなど、講座を分かりやすく伝えること、参加後の自分をイメージできることを意識して制作しました。また、卒業生の方々への取材も行いました。



クライアント:社会福祉法人海老名市社会福祉協議会様
 アートディレクション・デザイン・DTP:よこはま地域福祉研究センター S Tsukahara
 フォト(一部):よこはま地域福祉研究センター Y Kashiwada イラスト: Hiroki Ito

福祉の新しい見え方・隠れていた視点を引き出し ビジュアル化する

デザインのもつチカラは、一見関連性のないような散らばった情報から、エッセンスを取り込み、きちんと交通整理した上で、見える形にすることだと思います。

抽象的だった概念やアイデア、感覚的なものの中にある「本質」を探しながら、形に落とし込んでいくプロセスには、たくさんの取捨選択があります。

どんな分野においても、デザイン的な考え方は、創造的に問題を解決していく可能性を秘めています。

人々の「こうなったらいいな」のニーズを聞きながら、優しく、力強いイノベーションのお手伝いができると思います。

「海老名 de はたらく」障害のある人の働く場づくり web サイトの作成

<http://ebina-shakyo.or.jp/hataraku/>



クライアント：社会福祉法人海老名市社会福祉協議会様
 アートディレクション・デザイン：よこはま地域福祉研究センター S Tsukahara
 ロゴデザイン：Hiroki Ito
 HTML：株式会社イータウン



海老名市共同受注窓口は、障害者優先調達推進法に基づき、就労支援を行う事業所と企業等との仲介役となり、受注発注の調整（コーディネート）をおこなう機関です。海老名市では、障害者の社会における活躍と自立した生活を目指し、受注の拡大を推進し、安定的な就労と工賃の確保を図るため、この窓口を2019年3月に開設しました。クライアント（海老名市社会福祉協議会様）より、実施していくための広報、啓発的なツールとして、ウェブサイトの構築のディレクションの依頼があり、当プロジェクトで担当しました。また、商品パッケージなど、ブランディング的に使用できるロゴも完成しました。

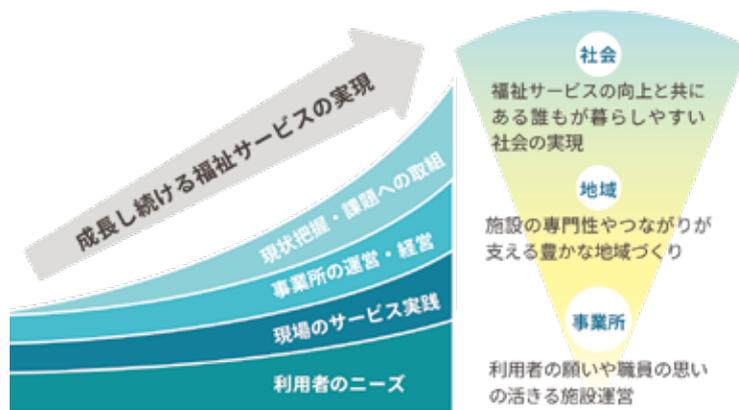
福祉サービス第三者評価

これからの「生き抜く」事業所になるために

福祉サービス第三者評価の受審対象は、2019年度も横浜市内の保育所が多い状況になっています。そのほか、川崎市、藤沢市の保育所、昨年度に引き続き、東京都の保育所の評価も実施することができました。また、横浜市内の障害分野からのご依頼もあり、福祉サービスの現場に足を運び、福祉を取り巻く社会の情勢、福祉サービスの現場に携わる職員やご家族の思いに触れ、寄り添う評価を目指してまいりました。

福祉サービス第三者評価の目的である、利用者へのサービスの質の向上に真摯に向き合い、職員全員が自分たちの支援を振り返り、個人として、組織として、改善を目指す道標を築く一助となればと考えています。

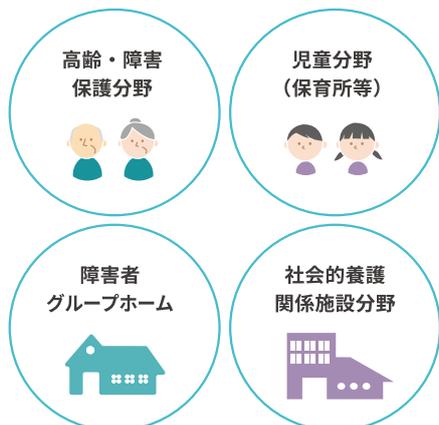
神奈川県の評価推進機構であるかながわ福祉サービス第三者評価推進機構では、「県全域で共通して使用する評価項目・評価基準」が導入され、2019年度は移行期間として、従来の評価項目と並行して実施しました。当センターでは、障害分野5施設と保育所3園で、県の標準的項目で行いました。新基準での評価に対応し、評価調査者、事業者、事務局ともに理解を深め、さらに私達らしい評価を目指して取り組んでまいります。



「利用者へのサービスの質の向上」の実現は、地域での福祉事業所としての存在感を育み、そして地域福祉の向上をもたらします。福祉サービス第三者評価の受審を通じて、4つの点を知ることができます。

- ① 利用者の想いや考えを知る
- ② 職員同士が気づきを得て、今後の組織的な取り組みを知る
- ③ 一般職員と管理者層職員の認識の違いを知る
- ④ 次のステップへの課題を知る

福祉サービス第三者評価 対象分野



Achievements

受審の成果

「対話×対話×対話」3つの対話が生み出す受審成果

全職員で取り組むからこそその「成果」

施設の自己評価における職員同士、管理者層と一般職員の対話から「沢山の気づき」が生まれます。

調査チームで最後まで議論を尽くすからこそその「成果」

調査チームにおける、評価調査者及び事務局の対話から生まれる「充実した報告書」を作成します。

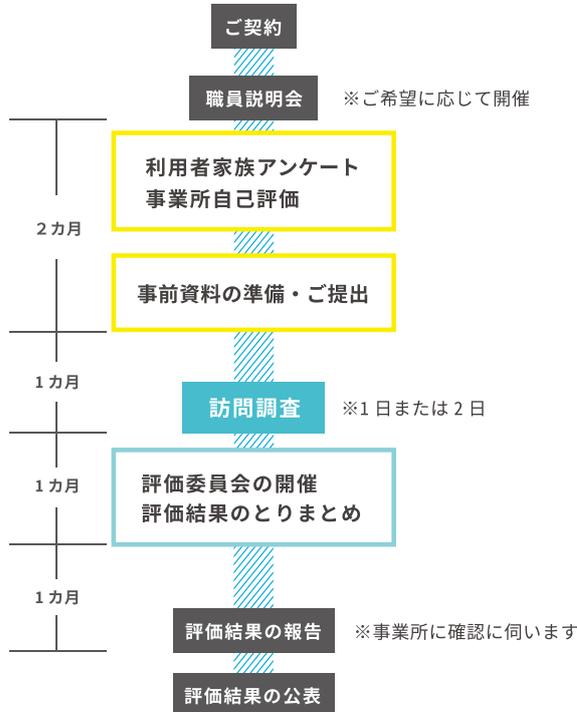
事業所の皆様と十分話し合いを重ねるからこそその「成果」

評価開始から最終の報告まで、丁寧な対話から生まれる「安心と納得」をご提供します。

Schedule

スケジュール

ご都合に合わせて4～8カ月程度でスケジュールを組みます。



2019年度実績 受審施設（順不同）

【横浜市認可保育所・13件】

スターチャイルド《長津田ナーサリー》
 スターチャイルド《新吉田ナーサリー》
 スターチャイルド《藤が丘ナーサリー》
 スターチャイルド《金沢文庫ナーサリー》
 スターチャイルド《岸根公園ナーサリー》
 保育園小紅／あおぞら菅田保育園
 パレット保育園・長津田
 パレット保育園・たまブラザー
 パレット保育園・高田
 SEAKID 保育園／久良岐保育園
 みなみマーノ保育園

【横浜市障害分野・5件】

多機能型事業所ジャンプ
 横浜療育医療センター
 ハイムあさ陽第一、第二／ハイム木もれ陽

【川崎市認可保育所・2件】

パレット保育園 高津／すきっぷ保育園

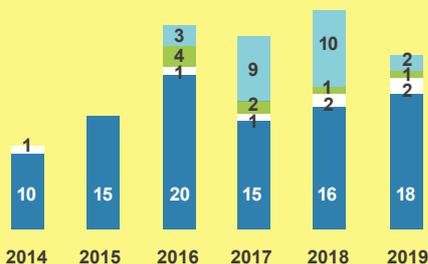
【藤沢市保育所・1件】 鶴沼げんきっず保育園

【東京都保育所・2件】

ヒューマンアカデミー中河原保育園
 てくてく保育園

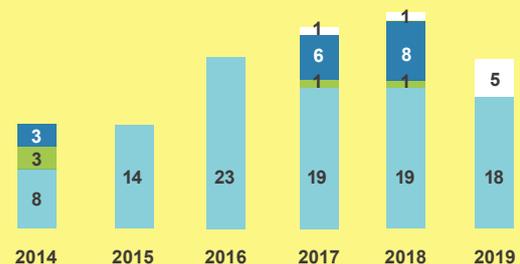
自治体別推移 (件)

- 横浜市内
- 川崎市内
- その他神奈川県
- 東京都 (H28年度～)



分野別推移 (件)

- 児童分野 (保育園)
- 児童分野 (社会的養護施設)
- 高齢分野
- 障害分野



指定管理第三者評価

横浜市内施設の指定管理者の皆様の努力によって実現されているサービスを、客観的指標により点検評価します。過去7年間、地域ケアプラザ評価を中心に実績を積んできました。評価機関として「誠実さ、公正さ」と「専門性、客観性」を持ち、時代に即した施設運営とサービスの質の向上につながるよう、本事業に取り組んでいます。

職員の皆様の日常業務の実際に寄り添い、対話を重ね、受審による「気づき」を多く生み出し、継続的な業務改善に活かしていただけるよう努めます。

2019年度実績

鶴見中央地域ケアプラザ

複合的な支援展開のできる人材の育成



人生100年時代が到来し、高齢者の生き方・暮らし方・支え方を社会全体で問われている今、地域包括支援センターには、地域の実情を適切に掴み、関係機関と連携しての課題解決力強化・包括的相談体制の構築が求められています。さらに、地域包括ケアシステムをより深化させた「地域共生社会」の実現を目指し、様々な施策整備が進んでいます。

地域包括支援センター職員として不可欠な知識を理解し、業務に必要な視点の獲得と複合的な課題のある対象者への支援、個別から地域支援へ発展させていく視点など、実践力の向上を図ることを目的に実施しました。(委託元：横浜市健康福祉局 地域支援課・高齢在宅支援課)

基礎編

対象：横浜市地域包括支援センターに所属する職員（保健師・社会福祉士・主任ケアマネジャー）で、概ね、経験年数1年未満の方で、平成30年度の横浜市地域包括支援センター職員研修 基礎編を未受講の方

開催日：A日程＞5/31（金）・6/12（水）・7/10（水） 9：30-17：00
B日程＞6/3（月）・6/20（木）・7/1（月） 9：30-17：00

受講延数：157名

参加実数：53名

プレワークの実施

第1回：横浜市地域包括支援センターの実践

第2回：地域包括支援センターが推進する権利擁護（アドボカシー）

第3回：総合相談の役割と実践法／地域包括ケアの実践



応用編

対象：基礎編の既受講者または、経験12か月以上の横浜市内地域包括支援センター職員

開催日：第1回 10/28（月） 9：30-17：00
第2回 11/28（木） 9：30-17：00
第3回 12/16（月） 9：30-17：00

受講延数：89名

参加実数：49名

第1回：高齢者の生活を包括的に支援する対人援助システム

第2回：当事者と家族に寄り添うケースワーク

第3回：身近な地域から育む共生社会（個別支援～地域支援への連動）



一人でも多くのこどもが家庭的な環境の中で 地域で健やかに成長できるように

里親制度は、何らかの事情により家庭での養育が困難又は受けられなくなったこどもたちに、温かい愛情と正しい理解を持った家庭環境の下での養育を提供する制度です。

当センターでは、横浜市の委託事業として、里親養成研修の実施にかかる業務を行ってきました。社会的養護の必要なこどもたちは年々増えてきています。こどもたちが地域で健やかに、より家庭的な環境の中で、大きな安心と安らぎを得ながら成長できるよう、一人でも多くの里親さんが誕生することを願って事業を実施しています。

保護を必要とするこどもの数は上昇の一途をたどり、厚生労働省の公表によると2018年度の全国児童相談所児童虐待相談対応件数は15万9850件に上ります。こどもたちが心身ともに健やかに養育されるよう、子育てにやさしい社会を作ることが望まれます。日本の里親等委託率は2017年で19.7%です。政府は里親等委託率を3歳未満児はおおむね5年以内に75%以上に、就学前のこどもはおおむね7年以内に75%以上に、学童期以上の子どもはおおむね10年以内に50%以上にすることを目標に掲げ、各自治体はこれを踏まえて目標を設定し2020年度から2029年度にかけて取り組んで行く事とし、里親養成は急務となっています。

2019年度実施した横浜市里親研修では、実子の子育て中の方や、児童養護施設などで勤務されている方の受講などが目立ち、関心の広がりを感じられました。しかし、参加者の声からも、里親制度への社会全体の理解がまだまだ進んでいないことは本事業の課題として、取り組むべきこととらえています。

社会的養護・家庭養護の現状（横浜市）

里親種別	認定（組）	委託数		特別養子縁組
		児童数	30年度新規委託数	30年度新規成立数
養育	123	65	14	5
養子縁組	45	7	7	6
親族	4	7	4	0
専門（再掲）	(1)	0	0	0
合計	172	79	25	11

社会的養護を必要とする子どもが生活している場所

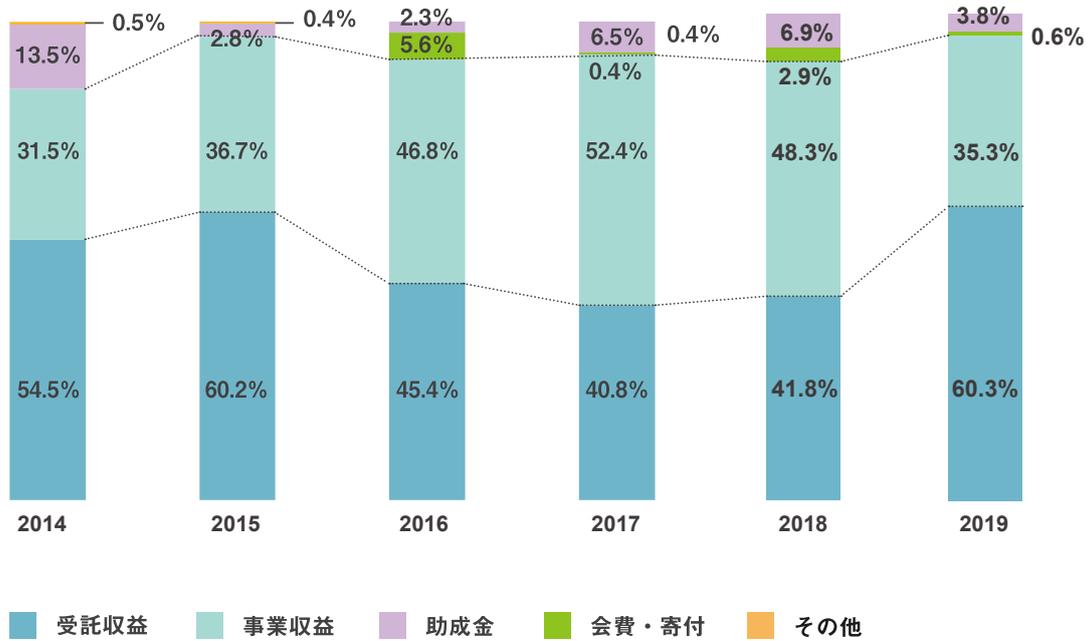
横浜市には、家庭で暮らすことができない子どもが約700名います。
(児童人口約58万人)

	施設種別	市内所管数
施設養護	(1) 乳児院	3 箇所
	(2) 児童養護施設	11 箇所
	(3) 児童自立支援施設	2 箇所
	(4) 児童心理治療施設	1 箇所
家庭養護	(5) ファミリーホーム（FH）	7 箇所
	(6) 里親	172 世帯

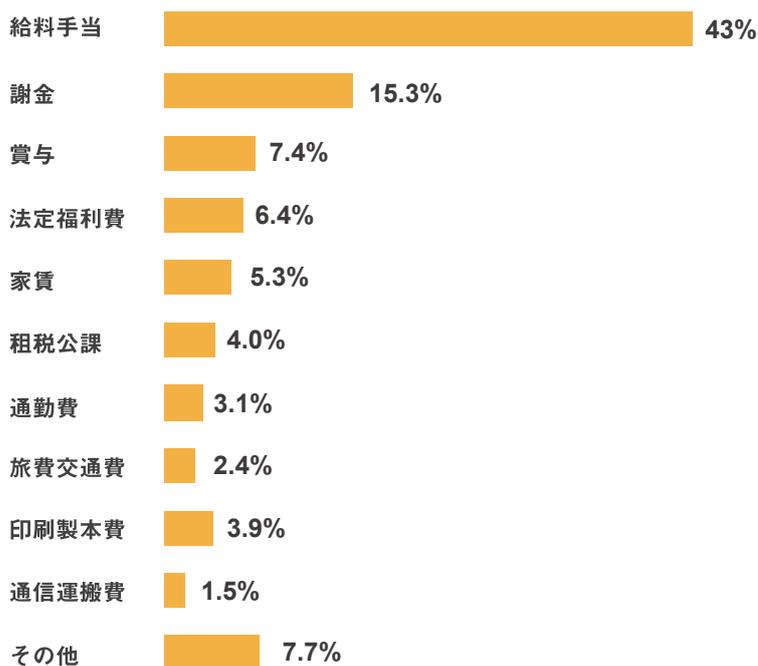
実施概要

基礎研修	全6回（座学と見学1日）	3月実施分は中止
登録前研修	全3回（座学2日）	
更新研修	全2回（座学1日）	
現任研修	全3回（座学半日）	
啓発研修	全1回（講演会 パネルディスカッション）	

事業収益内訳の推移



2019年度経費支出内訳



活動計算書

	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
経常収益					
1. 受取会費	115,000	100,000	95,000	150,000	185,000
2. 受取寄付金	0	2,000,000	0	700,000	0
3. 受取助成金	822,654	854,000	1,700,000	2,000,000	1,227,489
4. 受託収益	17,975,476	17,139,942	10,714,294	12,090,093	19,653,124
5. 事業収益	10,953,924	17,654,080	13,763,579	13,972,828	11,503,195
6. その他収益	321	24	36	30	16,007
経常収益計	29,867,375	37,748,046	26,272,909	28,912,951	32,584,815
前年比	115.4%	126.4%	69.6%	110.0%	112.6%
経常費用					
1. 事業費	30,483,380	35,209,957	25,018,739	25,918,663	30,501,945
2. 管理費	418,613	293,123	406,517	318,844	387,378
経常費用計	30,901,993	35,503,080	25,425,256	26,237,507	30,989,323
当期経常増減額	-1,034,618	2,244,966	847,653	2,675,444	1,595,492
過年度損益修正損	19,800	0	0	0	0
過年度損益修正益	0	0	0	0	0
税引前当期純利益額	-1,054,418	2,244,966	847,653	2,675,444	1,595,492
法人税支払額	79,000	74,500	74,500	74,500	74,500
当期正味財産増減額	-1,133,418	2,170,466	73,153	2,600,944	1,520,992
前期繰越正味財産額	480,525	-652,893	1,517,573	2,290,726	4,891,670
次期繰越正味財産額	-652,893	1,517,573	2,290,726	4,891,670	6,412,662

コロナ禍にあっても 地域社会と共にある中間支援団体で あるために

4月7日、新型コロナウイルスに係る緊急事態宣言が発令されました。

2019年度、よこはま地域福祉研究センターは、2月、3月に大きなフォーラムやイベントを控えており、それらは、半年前から企画・準備を進めていた事業でしたが、中止を余儀なくされました。

感染症拡大防止と、業務に関係する外部の方々、職員の健康を守るため、組織内で緊急体制をとり、時短勤務から、在宅ワークに切り替え、ゴールデンウィーク明けまでを乗り越えました。

新しい年度になってからは、コロナウイルス拡大の第2波に備えて、また、組織内で、予めより検討が必要とされていた「働き方改革」の一環として、業務管理体制を強化し、在宅ワークと出社してのワークの双方を効果的に行う体制づくりの検討を始めました。

- ・在宅ワークのリスクの洗い出し
- ・リスクを回避するための業務管理システムの新たな導入の検討
- ・新たな体制による仕事の生産性を高め、組織の発展につながる活用法

これらを段階を経て話し合うことは、そのことそのものが、設立から8年を経て、広がる業務の全体像や職員ひとり一人の仕事の行い方などを相互に確認するチャンスにもなっています。

実際の取り組み



センター主催勉強会vol.11

毎年2回、関心のあるテーマに沿って、職員、会員を含め、一般に広く公開した勉強会を実施しています。

非営利ワーカーの「WHY」に迫る



NPO で働く私たちほか非営利組織に所属する人が、日頃のコモモヤを解消し、緩やかに語り合う「モーニングサロン」を実施しました。ゲストは企業勤務を経て茅ヶ崎市に移住、独立・起業し複数の肩書を持ちながらビジネスとソーシャル&ローカルのサポートと実践を行っている清水謙さん。自身の仕事の「WHY」に迫り、個人・チーム・組織として何をすべきかを考える時間となりました。

日時 2019年10月26日(土) 10:00 ~ 12:30

会場：G Innovation YOKOHAMA

講師：コワーキングスペース「チガラボ」代表 清水謙さん

団体概要

設立年月日：平成24（2012）年10月1日

役員

理事長	豊田 宗裕	聖徳大学・聖徳大学短期大学部心理・福祉学部 社会福祉学科 教授
副理事長	佐塚 玲子	神奈川県社会福祉審議会委員 神奈川県立福祉保健大学 実践教育センター 講師 相模女子大学 社会マネジメント学科 講師 YMCA学院専門学校 講師
理事	太田 貞司	京都女子大学家政学部 生活福祉学科 教授
理事	松崎 吉之助	相模女子大学・相模女子大学短期大学部 人間社会学部 社会マネジメント学科 准教授
理事	加留部 貴行	九州大学大学院 統合新領域学府 客員准教授
理事	東樹 康雅	公益社団法人日本フィランソロピー協会 事業部マネージャー 一般社団法人ふらっとカフェ鎌倉理事ほか
理事	武田 千香恵	社会福祉士
理事	吉川 典子	社会福祉士
監事	吉田 三枝子	税理士

職員

佐塚 玲子	センター長・管理責任者
武田 千香恵	第三者評価主担当・事務局
吉川 典子	障害PJ主担当・事務局
塚原 祥子	広報PJ（デザイン）主担当・事務局
柿沼 陽子	第三者評価事務局・調査員
穂鹿 順子	経理・総務
沼 佐代子	子どもPJ主担当・事務局
山本 宣子	障害PJサポートスタッフ
石上 美和	事務サポートスタッフ
藤本 千寿	調査員・事務局
柏田 貴代	カメラマン
勝田 泰輔	ITサポートスタッフ
宮本 太郎	ITサポートスタッフ
山戸 一弥	ボランティアスタッフ



会員募集

よこはま地域福祉研究センターは、調査研究活動を柱に、地域福祉推進、社会貢献につながる実践を目指しています。開かれた研究組織として、地域社会の諸問題を解決し、その発展を目指そうとする市民・福祉事業に関する実務者・研究者等とコミュニケーションを図り、知識・情報等を融合させた取り組みを行います。そのために、私どもの考えにご賛同いただける方、ともに考え、活動して下さる方を募集しています。

〈会員について〉

当センターの会員は、次の2種類とし、研究会員としています。会員の皆さんは、総会での議決権があります。

■ 研究会員

この法人の目的に賛同し、入会した個人及び団体

市民研究員



福祉事業現任研究員



学識研究員



■ 賛助会員

この法人の目的に賛同し、事業を援助するために入会した個人及び団体の方。

〈会員のみなさまにお願いしたいこと〉

1. 総会へのご出席

前年度の annualreport をお送りします。事業内容等ご覧いただきながら、総会当日は新年度事業開始にあたり、皆さんと新しい発想が生まれるような企画にご参加いただきたいと思ひます。

2. 勉強会への参加

事業の中で、プロジェクトごとに皆さんのお力をお借りしながら、勉強会を開催しますので、ご参加をお願いします。また、最低年1回、全員参加の勉強会を開催しますので、ご参加をお願いします。

〈年会費〉

研究会員：	個人	5000 円
	法人・団体	10,000 円
賛助会員：	一口	10,000 円

HAPPINESS

地域の「しあわせ」を考え・行動する NPO法人 よこはま地域福祉研究センター

Annual Report 2019.4 - 2020.8